慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	序
Sub Title	
Author	国分, 良成(Kokubun, Ryosei)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.1 (2011. 1) ,p.v- viii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	田中俊郎教授退職記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110128--004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

法学部教授ならびに慶應義塾常任理事として慶應義塾と法学部の学問と教育の発展に尽くされた田中俊郎教授が、本年三月末日をもって定年により慶應義塾大学法学部をご退職される。田中先生は日本のＥＵ研究を開拓・推進されたパイオニアであり、その活躍は日本に止まるものではなかった。世界ＥＣ学会の副会長をはじめ、日本ＥＵ学会理事長、アジア・太平洋ＥＵ学会会長、日本国際政治学会理事といった要職を通じて、世界各国のＥＵ研究者とネットワークを築いてこられた。日本ＥＵ学会では、一九八〇年の日本ＥＣ学会設立にあわせて理事および初代事務局長となり、一貫してその学会活動を牽引し支えてこられた。また塾内でも国際センター長や常任理事を歴任し、義塾の国際化に多大な貢献をもたらした。研究対象であるヨーロッパとＥＵに対する愛情と、母校であり教壇に立つ慶應義塾に対する愛情は、田中先生がこれまで一貫して堂々と誇りにしてきたものであった。

田中先生は一九四六年三月に鳥取県米子市で生まれ、三歳の時には東京に引っ越している。父親が横浜正金銀行に勤めていた関係で、幼少時代にイギリスでの学校生活を経験している。いわゆる帰国子女のはしりで、私立のプレップ・スクールで「小英国紳士」としての教育を受けた。英語があまり通じずにこにこするしかない毎日であったと振り返るが、社交的でスポーツマンの先生はサッカーで大活躍をすることで周囲の尊敬を集めるようになったという。まだ一ポンド一〇〇八円の時代で、日本人にとってイギリス社会がはるか遠い時代であったに

も拘わらず、このように見事に交友を広げる姿は、ヨーロッパの研究者に混じって堂々と研究を披露する現在の田中先生のご活躍に通じている。

その後、本塾法学部政治学科に入学し、厳格だが学生に人気のあった内山正熊教授の研究会に入り国際政治学と西洋外交史を学ばれた。恩師内山教授の薦めもあり大学院に進学し、修士課程修了後は助手、専任講師、助教授のコースを歩んでいった。法学部に入学後、本年の定年に至るまで慶應義塾での生活は四六年にわたる。その間、田中俊郎研究会（俗称たなとしゼミ）は政治学科の一大人気ゼミとして学生の憧れであり、そこから多くの優秀な卒業生と数多くの研究者を輩出してきた。日本におけるＥＵ研究の若手研究者の多くが田中門下生である。

田中先生は若い頃、この長い義塾での教員生活を見通して、「河岸を替えよう。そうしないとカビが生えてしまう」と、積極的に留学をして海外での研究を行う決心をされたという。それゆえ、米国タフツ大学フレッチャー・スクール留学、英国サセックス大学留学、ベルギーでのＥＣ日本政府代表部専門調査員、イタリア・フィレンツェのヨーロッパ大学院（ＥＵＩ）、さらにはベルギーの欧州政策センター（ＥＰＣ）と、旺盛に新しい環境での研究に挑戦してこられた。この色鮮やかな研究活動が、現在の世界に広がる人的ネットワークをつくってきたことはいうまでもない。

恩師内山教授は、「田中君は事務能力があるから使われるよ。気をつけた方が良いよ」とアドヴァイスをされたようだ。国際センター副所長を三年、所長を六年務めた間に数々の新しい留学プログラムをスタートさせ、慶應義塾の国際化のための大きな貢献をなし、さらには、安西祐一郎塾長の下で常任理事の大役を務められたことを考えると、内山先生の予言は的中したといえる。常任理事時代に、三田会を通じた塾員関係の仕事で人的交流を広げ、国際交流担当で義塾の国際化を進められたことは、田中先生のそれまでの歩みを象徴するようなご活躍といえるだろう。しかし体調を崩されたこともあり四年の任期でこの役職を退き、法学部に戻ってこられた。

しかし田中先生の活躍を求める声は後を絶たず、引き続き数々の役職をこなされる運命となる。まず、「魅力ある大学院教育（ＫＩＰＳ）」の代表となり、法学研究科における政治学教育の拡充のために大きな貢献をなした。すでに欧州委員会からの公認のジャン・モネ・チェアのポストに就いていた田中先生は、その後ＥＵの支援を受け本塾先導研究センターの認可を受けたジャン・モネ慶應ＥＵ研究センターの初代センター長となり、さらには一橋大学と津田塾大学とのコンソーシウムであるＥＵ研究センターのＥＵＳＩ所長に就任した。それらに加えて、グローバルＣＯＥ「市民社会におけるガバナンスの教育研究拠点」の拠点リーダーに、二〇一〇年六月に就任した。国際化が進展し、幅広い人的ネットワークが不可欠となる現在の研究教育環境において、田中先生の指導を求める声は後を絶たない。

また、日本におけるＥＵ研究を長年牽引されてきた田中先生は、現在に至るまでこの分野の最良のテキストと評される『ＥＵの政治』（岩波書店）を一九九八年に刊行された。複雑な欧州統合を解説する最も信頼できる専門家として多方面で活躍されている。現在二七カ国体制となり、単一通貨ユーロが危機に直面する中で、不透明さの増すＥＵの将来を見通す上で田中先生の活動の場は増える一方であろう。

私個人としての田中先生とのお付き合いは、私が大学院生の時代に遡る。優秀な研究者としての道を一直線に歩み、いつも若手教員のリーダー的存在であった田中先生はわれわれ後進の憧れでもあった。それ以来、長いお付き合いになるが、今日にいたるまで田中先生の口から慶應義塾と法学部についての批判めいた発言をお聞きしたことがない。先生は根っからの慶應ボーイであり、ミスター法学部である。サッカー少年であったことは先に触れたが、田中先生は一九九二年以来、慶應義塾体育会ソッカー部長として部の発展にご尽力され、この三月のご退職まで任期を全うされることになっている。

常に笑顔を絶やさず、困難な状況でも楽観主義を失わず、周りを配慮すると同時に常に後進を励ますことを忘

れない田中先生の法学部での存在は、あまりにも大きい。池井優名誉教授が「にっこり笑って、ばっさり切る」と評されたように、その魅力的な笑顔の背後には、理性的な判断と勇気ある決断力が存在する。その田中先生が法学部を離れることは、大変に巨大な損失である。とはいえ、ＥＵ研究の日本での中心的な拠点となった慶應義塾大学で、今後も田中先生には色々とご指導を頂けるものと確信している。また法学部において田中先生の学問を継承する細谷雄一准教授も、先生の良き薫陶を受けてすでに日本のみならず世界で活躍する逸材に育っている。

最後に、田中俊郎先生のますますのご健勝とご活躍を祈念して、本号を謹んで進呈させて頂きたいと思う。

平成二三年一月

法学部長　国分良成